

被服

多いが、未遂者は小さいパンと塩サンマのスープだけである。

被服は、囚人の古い汚れたのが支給される。

その他

日常生活で困るのは紙（落とし紙）の支給がないことである。最初のうちは持っていた本で間に合わせたが、それがなくなると服の綿を抜いては使用した。それも限度があり、用を足す場合は、作業に行った時に木や草の葉を使用した。また、便所は何の仕切りもなく、顔を見合わせながら行った。

夕食後は共産主義の講義が行われる。これに従わないと反動分子として大衆の面前にて吊るし上げられる。また婦国も遅れる。私は非協力者として昭和二十四年の八月の末まで残された。

強制抑留されて

熊本県 坂本重喜

大正十四年一月二日、熊本市春日町（北岡神社裏）に生まれ、五福高等小学校に学び、同青年学校へと進んだ。父は鉄工所を経営しており、学業の傍ら工場の手伝いをしていた。

昭和十九年七月徴兵検査を受け、近視のため第二種だった。ところが、同年十月には熊本の十三連隊に入隊、その夜、自宅近くの北岡神社境内で夜営をし、そのまま汽車に乗り、門司へと移動、入隊して熊本には一晩いたただけだった。

釜山に上陸し、ハルビンを通りハイラルの国境守備隊へ配置された。迫撃砲隊に配属され、昭和二十年八月初め嫩江へと移動中チチハル付近で終戦を知った。同年八月十八日武装解除され、三週間収容所において、千五百人の作業大隊を編成、貨車でクラスノヤルスク

の第三収容所に着いた。

一年半くらいロシア人の住宅建設に携わり、凍って土が掘れないので柱の根本に土を盛り、水をかけ凍らせて動かないようにしてやっていた。

昭和二十二年春、キロワ炭坑へと移動、一年半くらい住みついた。三交替で八時間ずつみっちり作業が続けられた。坑道に穴を掘りダイナマイトを仕掛け爆破するもの、大きなシャベルで石炭をトロッコに積み込むもの、坑道の支柱を立てたり外したりするもの、色々の工程に分かれていた。ラーゲルから四キロ余り、凍りつく寒さの中を二時間かけて職場への通勤だ。三交替のためカンボーイもつかず、個々バラバラに行き来するのである。仕事が終わるのもまぢまぢから、街の国営店等に立ち寄り、小遣い銭程度の賃金でパンやタバコを買って帰るのが楽しみだった。

ある日、支柱の取り外し作業中、右足指に柱が落ち、骨折した。しかし軍医には骨折がわからず、痛みをこらえて作業に駆り出された。ついに足が腫れ上がり動けなくなり、やっとラーゲルの中の一室に入室し

た。治療は何もしてくれない。動くこともままならず、栄養失調になり、コルホーズに派遣された。毎日ジャガイモ、キャベツ、トマト等新鮮な野菜を食べ、回復してきた。この半年で命拾いしたと思っ

る。衣服は季節に合わせて支給され、程度もままあだった。食事は塩ざけ、ニンシ、粟、ひえ等の雑炊、一日一食はパンとスープで、一週間に一回は、白米の銀シャリもあった。二段ベッドに雑魚寝だったが、ベイチカはしっかりしており、薪で暖を取った。二週間に一回蒸し風呂はあったが、シラミには悩まされた。炭坑時代はシャワーを浴びていた。休日は週に一回。

民主教育は毎日朝晩あり、アクチブに油を絞られた。このような状況の中、入ソ一年で四百人が栄養失調等で死んだ。

昭和二十三年十月二日、恵山丸で舞鶴に上陸、一週間してやっと熊本に帰ることができた。

昭和四十四年から現在地で氷、燃料（薪炭、プロパンガス）の販売をしている。